

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990100844		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホーム ジョイフル(ユニット1、ユニット2共通)		
所在地	栃木県宇都宮市中岡本 2389-1		
自己評価作成日	令和3年2月10日	評価結果市町村受理日	令和3年4月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	令和3年3月3日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者1人ひとりの残存機能を生かし、これらを継続をし楽しく生きがいを持って生活出来るよう、職員一同で支援している

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

穏やかでゆっくりした生活が送れるように、利用者一人ひとりの好きなことを継続できるよう支援している。一日の日課も無理にその時間に行うことはせず、利用者の意思を尊重するよう管理者は職員に伝えている。毎月の定例会や研修会で職員から出された意見提案は全職員で考えることを基本にしている。そのことで全員の意思の統一が図れ、声掛けの仕方、支援の仕方の統一に繋がっている。3食とも事業所のキッチンで手作りをしている。利用者はマイエプロンを持っており、食事作りや片付けなど自主的に参加して、本人の力を発揮できる場面となっている。行事食やおやつ作りも多彩で利用者と職員が一緒に作ることを食べることを共に楽しんでいる。天気がいい日にはほぼ毎日のように施設周辺に散歩に出かけており、利用者の日々の楽しみになっている。四季折々の外出ではもみじ狩り、コスモスや色づいたイチョウの木を見にでかけたりと数多い。職員はコロナ禍であっても場所を選びながら外出をして、利用者の気分転換やストレス発散できるように努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない			○	4. ほとんどない (コロナウィルス感染の
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが			○	2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
		○	4. ほとんどいない (コロナウィルス感染				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)		1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況		
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり、一緒に、楽しみながら」その人らしさを大切に、職員で共有し理念を念頭に置き、生活支援を実践につなげていっている	法人共通の理念である「ゆっくり・一緒に・楽しみながら」のもと、穏やかでゆっくりした生活が送れるように、利用者一人ひとりの好きなことを継続できるように支援している。一日の日課も無理にその時間に行うことはせず、利用者の意思を尊重するよう管理者は職員に伝えている。洗濯、掃除、調理も利用者と職員が一緒に自然な形で行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの為、地域の方との交流、催しなどは現在中止している	グループホーム開所準備の内覧会は、新型コロナウイルス感染拡大直前であったため、地域の人もたくさん参加していた。地域の自治会長や民生委員が関わり、ボランティアの人にも声を掛けて、地域との交流の機会を作る段階でコロナ禍の状態となってしまった。地域とのつながりを直接作ことは足踏み状態である。しかし、地域包括支援センターが主催した地区住民を対象とする認知症に関する学習会に協力し、グループホームジョイフルと併設する看護小規模居宅支援施設の説明をしている。その場に参加した全員に質問されたことで、地区の人の認知症への関心の高さを感じ取っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	7月18日河内町市民センターにて、認知症を持つ家族との交流会、質疑応答の講演会を開催した		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルスの為、2カ月に1回書面での報告を行っている	運営推進会議は、地元の自治会長と民生委員、地域包括支援センターの参加で、グループホーム開設後1回目の委員会が開催できただけで、その後はコロナ禍で書面での開催となっている。書面で報告、意見交換を行い、議事録にして委員に配布している。議事録からは、コロナ禍の中で工夫して行事に取り組んでいることが評価され、コロナ終息後の運営に期待が持たれていることが窺える。	

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議を通して、利用状況、活動実績、行事報告等の報告を行っている	市との関係では、グループホーム開設に関する相談をすることはあったが、開所後は運営に関する報告書を届ける以外の機会は少ない。宇都宮市と合併したことで、運営推進会議に市の職員が参加することは無く、市からコロナ禍での情報の伝達等はあるが、協力関係を築くまでの機会が作れないでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年二回の研修を指針と共に職員と共有し玄関の施錠、ベット柵への理解をし業務を行っている	毎月行われている事業所の研修計画の中で、身体拘束等の適正化のための対策として年2回の研修を行っている。1回目は、事業所の「身体拘束廃止の指針」を用いて、理解、防止、廃止の必要性を学び、2回目は「身体拘束ゼロの手引き」と事業所の「身体拘束廃止の指針」から具体的な取組を学んでいる。それらの研修では、事例で検討することで実践に活かせるような内容になっている。身体拘束適正化委員会を兼ねている運営推進会議では意見交換が行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修の実施と支援中の職員の言動を把握と知識、技術を習得し、職員間、管理者に相談できる関係性を大切にしている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員の中には成年後見制度、日常生活自立支援事業について理解をしている人も居るが、全員ではないため、来年度の研修項目にする		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には疑問点などを引き出し、理解されるよう1つ1つ丁寧に誠意を持って対応している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見要望などは、迅速に対応している。また、外部者への紹介などは契約の際に紹介している	開設して間もなくコロナ禍となり、家族が通院介助や面会で訪れるのも短時間と制限があり、職員とゆっくり話す機会も無い。ただ、毎日家族の誰からか電話があるので、その機会に情報を伝えて意見を聞いている。毎月の請求書に添付する送付状で、利用者が暮らしている様子を撮ったカラーの写真と毎月の様子を分かりやすく書き知らせているが、今のところ家族から具体的な意見や要望は寄せられていない。	

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の定例会議、研修または、その後で意見や提案を行う。また、朝礼の時なども同様	毎月の定例会や研修会では職員から活発な意見が出ている。職員から出された意見提案は全職員で考えることを基本にしている。そのことで全員の意思の統一が図れ、声掛けの仕方、支援の仕方の統一に繋がっている。入院を機会に車椅子の状態で戻ってきた利用者には、車椅子でなく歩かせたいと全職員で話し合い、サークル歩行器を使い支援することで、利用者の笑みを引き出している。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎日の業務の中で、職員個々の意欲、体力、能力を見極め、職員の声を拾って解決している			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりが持っている能力を伸ばし、向上心を高められるように指導している。外部の研修も受けることで知識を身につけられるようにしたい			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	湘風会栃木支部でのケアマネ・管理者会議を毎月実践。各事業所ごとに報告会を開催している			
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談、アセスメント、実調の時に本人の希望、悩みや不安な事を誠意を持って対応し、入居してから様子観察を行っている			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談、契約時など誠意を持って1つずつアドバイスや提案などをし信頼関係を作っている			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメントする際に、本人や家族にとって1番必要なことは何かを見極め対応している。			

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の自尊心を傷つける言動を控え、教えられることも多い信頼される支援を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族の関係性を大切にし、本人の様子や変化などを常に連絡を取っている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	葉書のやり取りを支援したり、連絡を取りたいなどの訴え時対応している	かかりつけ医への受診の帰りに家族と外食することも自宅に立ち寄ることも、コロナ禍でできなくなり、家族の面会の時間も制限する状況であるので、関係性の継続に苦慮している。そんな中、家族からタブレットを預かり職員が操作を行い、画面で利用者と家族が会うことができる支援もしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	社交的な人、人見知りの人など孤立しないように、ホールでの席替えや一緒に会話には入れるよう職員が関わっている		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院などで退去した後も具合の様子などを連絡したり「なにかありましたら」と言葉を添えている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居したあと、本人が思い描いた事と同じであるかどうかを話をしている。ご希望に添えるように最善を尽くしている	申込みの時点から意向把握を開始し、計画作成担当者でもある管理者が訪問し、家族や同席する居宅介護支援事業所のケアマネジャーから情報を得ている。入所時には全職員の関心がその人に向いている時期なので、困っていることや好きなことを、声を掛けながら見つけている。また、家族からアルバムを持って来てもらい、それを一緒に見ながら利用者の思いや意向を把握するきっかけとなるよう工夫をしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居相談や実調の時に生活歴や暮らしてきた歴史などを聞き、常に把握しながら支援している		

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前に生活歴を聞いており、暮らしてきた事柄を常に把握しながら支援している			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画書作成時、本人や家族の意向、プランの見直しなど話し合いをしモニタリングに反映している	ユニットごとに管理者が配置され計画作成担当者にもなっている。介護支援専門員の資格を有する職員が両ユニットの計画作成担当者の業務を監督している。計画作成担当者でもある管理者は、ニーズ把握のための入所時アセスメントを入居申込み時から開始し、最初の介護計画策定のために行うサービス担当者会議では本人や家族から意向を聞き、計画を策定している。実施状況のモニタリング・評価は毎月行い、再アセスメント、計画の見直しのためのサービス担当者会議、計画見直しと続く、一連の流れ(PDCRサイクル)の確立を目指している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人の記録は細かい様子や言動などの記入、ヒヤリハットを多く挙げるようにし事故防止に役立て、職員間の話し合い、見直しをしている			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状況の変化、家族の状況を常に把握し、サービスの追加や支援を行っている			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	行政、NPO法人、ボランティア団体、介護事業者、医療関連、民間企業などの協力を得ながら、満足のいく介護サービスを考え高齢者に充実した環境の提供を支援している			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居の相談や入居前の健康診断の時、かかりつけ医がいない人には、協力機関の病院を勧めている	かかりつけ医への受診介助は基本的に家族に対応してもらっている。緊急時や併設されている同法人クリニック(内科、整形外科、リハビリテーション科)に通院の場合は職員が付き添っている。家族が受診介助の場合には、利用者の状態やバイタルをメモまたは口頭で伝え、受診結果は職員が家族から聞き取り、申し送りノート等に記入し全職員がチェックし共有している。利用者の状態を見ながら必要に応じて管理者がかかりつけ医と直接話をしている。		

自己 外部	項 目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		実践状況			
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ジョイフルには看護師が在職していないが、1階のきぬの流れに看護師がいるため、相談して受診が必要なアドバイスを受けている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族の方と様子や治療の内容等を情報交換し、入院先の担当看護師への連絡、退院に向けての相談員と今後の生活について実調を行っている		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	高齢な事、持病がある事を考慮し、契約の際終末期についての考えを聞いている	入居時に家族には重度化や看取りについて、現時点では事業所として医療行為が伴う状態での対応は難しいと伝えている。利用者の状態が変化した時には事業所としてできる対応について段階ごとに家族に説明し話し合っている。現在看取りの希望者はおらず、また、利用者の中に重度化したり終末期を迎えている人はいない。	今後事業所での看取りを希望する利用者が出てくとも考えられる。併設されたクリニックや訪問看護ステーションとの連携や協力が得やすい事業所なので、看取り受け入れについて話し合いを行い、職員の教育や研修を実施して職員全員の認識や意欲を高めつつ、体制作りに取り組むことを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	研修を行い、またシミュレーションをし緊急連絡の仕方をホールに掲示しているため、職員全員把握している		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	研修を行い、日中と夜間の時の違い、避難経路、消化器の場所など把握、又年2回の避難訓練を実施している	併設された看護小規模多機能型居宅介護施設と合同で、避難計画に沿って通報、初期消火、避難誘導訓練を行っている。事業所が2階にあるため、車いす使用の利用者には毛布等を使用して2人で避難させるなど職員同士で利用者の避難方法を検討している。消火器は職員全員が使用できるようにしており、避難時非常時の持ち出し書類等はリストアップされていて、備蓄品は日用品、食料品等揃えている。また、地震や風水害時の法人としてのマニュアルが整備されている。	開所した当初からコロナ禍で近隣住民との関係が構築できていない現状がある。災害時に地域住民との協力体制が築けるよう、自治会長や民生員が出席する運営推進会議を通して具体的な協力内容を示し理解と協力が得られるよう、今後の努力に期待したい。

自己 外部	項 目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
		実践状況			
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇マナーを学び一人一人の自尊心を傷つけないようプライドの尊重し、個人情報に気を付け、言葉かけが悪い職員に気が付いたときにはアドバイスをを行っている	職員は利用者の名前を「さん」付けで呼んでいる。職員は利用者と毎日共に過ごすことで馴れ合いにならないように丁寧な言葉使いで視線を合わせながらゆっくりと話すように努めている。排泄介助時の汚物の処理はさりげなく、トイレのドアの開閉や居室に入室時等にはプライバシーへの配慮を欠かさないようにして、個人の尊厳やプライドを守る支援を心掛けている。個人情報等書類は鍵付きの棚で管理されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	若いときの仕事や行っていた趣味を勧めるように支援している		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決まりにこだわらず、利用者の様子をみながら、今何をやるべきかを職員全員で支援している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員の思いではなく、利用者の好みを尊重しネイルなどのケアを定期的に行っている		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りは利用者と一緒にいき、味付けも相談している。また、洗い物の後片付け、テーブル拭きを行っている	職員が1週間ごとに献立をたて3食とも事業所のキッチンで手作りをしている。職員は利用者の好みを把握していて柔軟に対応している。利用者はマイエプロンを持っており、食事作りや片付けなど自主的に参加して、本人の力を発揮できる場面となっている。行事食やおやつ作りも多彩で、利用者と職員と一緒に作ることを共に楽しんでいる。利用者の希望を聞きながらバラエティーに富んだテイクアウトを利用したり、弁当を持って外で食べることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	野菜料理を中心に献立を考え、塩分を控え栄養が偏らないようにし、水分量のチェックを付けている		

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立できない簡単に終了してしまう利用者には、職員見守りで行っている。夜の歯洗浄剤も使用している			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居時には使用していたパットなど、失禁が見られなくなった利用者は布パンツに替えることもあり様子観察をしながら支援している	トイレの場所が分かりやすいように表示がしてあり、トイレは広く通常の使い方でも車椅子でも開閉しやすい扉になっている。利用者は布パンツやリハビリパンツにパッドを併用し、トイレでの排泄ができています。夜間は転倒しないように見守りで対応している。入院によりリハビリパンツになった利用者が退院後、本人の意思を尊重し職員の適切なトイレ誘導で布パンツになった事例がある。職員は、できることは自分でしてもらいながら自立を妨げることのない排泄支援を心掛けている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜、水分量また毎日の運動で腸の動きが活発になるよう工夫して、便秘にならないよう支援している			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	臨機応変に時間を設け、入用剤を利用し入浴する楽しさを提供している	浴槽や浴槽周りにある手すりが利用者一人ひとりの体の状態に合わせて調整できるなど、安全な入浴と介助者の負担を少なくする環境整備がなされている。利用者は週2回から3回、午前中に入浴し、湯の温度は利用者の希望に合わせて対応している。職員は利用者が安心してそれぞれのペースでゆっくり入浴できるように見守っている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者に対して強制はしていなく自由に好きなこと、好きな時間の使い方をしてもらっている。ゆったりと居心地が良く生活して頂けるよう支援している			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情については、個人ファイに入っており、新しく処方された内服薬についての説明は、職員の申し送りノートに記入して職員に気が付いたときには周知している			

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴は個人ファイルのアセスメントに書いてあり、入居前、入居後など1人ひとりに合った支援を心掛けている			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナウイルス感染により実施していない。施設内の散歩は天気の良い日に外に出て気分転換してもらっている	天気がいい日にはほぼ毎日のように施設周辺に散歩に出かけており、利用者の日々の楽しみになっている。利用者の体調や身体能力に合わせて40分コース、15分コースがあり、利用者によっては玄関前に置かれたベンチで日向ぼっこをする人もいる。四季折々の外出ではもみじ狩り、コスモスや色づいたイチョウの木を見にでかけたりと数多い。職員はコロナ禍であっても場所を選びながら日常と変わらぬ外出をして、利用者の気分転換やストレス発散できるように努めている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にはお預かりしていませんが、ご家族様希望の方は管理者管理にてお預かりしています			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご利用者の希望時、ご自分で掛けることが出来ない方には職員が代行して掛け、お話しして頂いている。家族からの電話も取り次ぎ対応している			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ユニットごとに玄関があり、季節によって花や置物を替え工夫している。共有スペースにはソファ等を用意し寛げるようにしている	玄関には季節の花が飾られている。広々とした明るく開放的な居間兼食堂には利用者と職員が一緒に食事作りができる大きな対面式キッチンがある。ソファもあり利用者は新聞を読んだりテレビをみたりそれぞれゆったりと過ごせる場所となっており、畳のスペースでは利用者が腰かけて洗濯物をたたむこともある。壁には職員と利用者が一緒に作った貼り絵の大作が飾られている。ユニット共有の広めのホールでは、テーブルや椅子が置かれており利用者が寛いだり運動会などを行う場所になっている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関入り口のベンチや畳部屋に腰かけ談話する姿見られる。ホールの席も食事以外は思い思いに座り話されている			

自己	外部	項 目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時、ご家族様と相談しながら、ご自宅で使用していた物や好みの物などを持参して頂いている	居室には洗面台、エアコン、カーテン、ベッド、ナースコール、そして整理しやすい棚をつけた高さのあるクローゼットが取り付けられている。部屋の広さも十分でどの部屋も日当たりがよい。利用者はテレビやお気に入りの物を持ち込んで居心地の良い空間になるように工夫している。衣替えは基本的に家族が行うことになっているが、現在はコロナ禍で職員と利用者が行っており必要な物は家族に伝えている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人一人の力量に応じて安全に自立した生活が送れるように配置や車椅子の置き場にも配慮している。随時安全な環境作りに心掛けている		